

7/9 Tue.

第640回 定期演奏会
サントリーホール 19時開演
SUBSCRIPTION CONCERT No.640 / Suntory Hall 19:00

指揮
Conductor
チェロ
Cello
コンサートマスター
Concertmaster

コネソン
CONNESON

矢代秋雄
YASHIRO

[休憩]
[Intermission]

ブラームス
BRAHMS

カタリーナ・ヴィンツォー *-p.5*
KATHARINA WINCOR

ユリアン・シュテッケル *-p.7*
JULIAN STECKEL

林 悠介
YUSUKE HAYASHI

《ラヴクラフトの都市》から“セレファイス”
(日本初演) [約9分] *-p.9*
‘Celephaïs’ from “The Cities of Lovecraft”

チェロ協奏曲 [約22分] *-p.10*
Cello Concerto

交響曲 第2番 二長調 作品73 [約43分] *-p.11*
Symphony No. 2 in D major, op. 73
I. Allegro non troppo
II. Adagio non troppo
III. Allegretto grazioso (Quasi andantino)
IV. Allegro con spirito

7/13 Sat.

第268回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14時開演
SATURDAY MATINÉE SERIES No.268 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

7/14 Sun.

第268回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14時開演
SUNDAY MATINÉE SERIES No.268 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

指揮
Conductor

フルート
Flute

ハープ
Harp

コンサートマスター
Concertmaster

ドヴォルザーク
DVOŘÁK

モーツァルト
MOZART

[休憩]
[Intermission]

ドヴォルザーク
DVOŘÁK

カタリーナ・ヴィンツォー *-p.5*
KATHARINA WINCOR

マチュー・デュフォー *-p.7*
MATHIEU DUFOUR

景山梨乃 (読響ハープ奏者) *-p.8*
RINO KAGEYAMA (YNSO)

長原幸太
KOTA NAGAHARA

序曲《謝肉祭》作品92 [約10分] *-p.13*
Carnival Overture, op. 92

フルートとハープのための協奏曲 ハ長調
K. 299 (297c) [約30分] *-p.14*
Flute and Harp Concerto in C major, K. 299 (297c)
I. Allegro
II. Andantino
III. Rondo: Allegro

交響曲 第8番 ト長調 作品88 [約34分] *-p.15*
Symphony No. 8 in G major, op. 88
I. Allegro con brio
II. Adagio
III. Allegretto grazioso
IV. Allegro ma non troppo

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術等総合支援事業（公演創造活動））
独立行政法人日本芸術文化振興会
協力：アフラック生命保険株式会社

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
共催：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京芸術劇場
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術等総合支援事業（公演創造活動））
独立行政法人日本芸術文化振興会

7/19 Fri.

第674回 名曲シリーズ
サントリーホール 19時開演
POPULAR SERIES No. 674 / Suntory Hall 19:00

7/21 Sun.

第136回 横浜マチネーシリーズ
横浜みなとみらいホール 14時開演
YOKOHAMA MATINÉE SERIES No. 136 / Yokohama Minato Mirai Hall 14:00

指揮
Conductor

ピアノ
Piano

特別客演コンサートマスター
Special Guest Concertmaster

ウェーバー
WEBER

ショパン
CHOPIN

[休憩]
[Intermission]

ブラームス
BRAHMS

エリ阿斯・グランディ -p.6
ELIAS GRANDY

マリー＝アンジュ・グッチ -p.8
MARIE-ANGE NGUCI

日下紗矢子
SAYAKO KUSAKA

歌劇《魔弾の射手》序曲 [約10分] -p.16
"Der Freischütz" Overture

ピアノ協奏曲 第1番 ホ短調 作品11 [約43分] -p.17
Piano Concerto No. 1 in E minor, op. 11
I. Allegro maestoso
II. Romanze: Larghetto
III. Rondo: Vivace

交響曲 第4番 ホ短調 作品98 [約39分] -p.18
Symphony No. 4 in E minor, op. 98
I. Allegro non troppo
II. Andante moderato
III. Allegro giocoso
IV. Allegro energico e passionato

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術等総合支援事業（公演創造活動））
文部科学省 独立行政法人日本芸術文化振興会

協力：横浜みなとみらいホール（7/21）

※7/19公演では日本テレビの収録が行われます。

指揮

カタリーナ・ヴィンツォー

KATHARINA WINCOR, Conductor

若きスターが描く
クラシック音楽界の
未来予想図



©Andrej Grlic

今シーズン、ケルン放送（WDR）響、BBC響にもデビューして成功を収め、欧米で急速に注目度が高まっている新鋭指揮者。ブラームス、ドヴォルザークからコネソンや矢代秋雄まで幅広い作品を振り、鮮烈な日本デビューを飾る。

1995年、オーストリア・オーバーエスターライヒ州生まれ。ウィーン国立音大とチューリヒ芸大で学び、ムーティ、ズヴェーデンらのマスタークラスに参加。24歳の時にルイーダが音楽監督を務めるダラス響の副指揮者に就任し、一躍脚光を浴びる。2020年、マーラー国際指揮者コンクールで第3位に入賞し、ロイヤル・コンセルトヘボウ管でのI. フィッシャーのマスタークラスにも招かれた。

近年は、ベルリン・ドイツ響、ドレスデン・フィル、リンツ・ブルックナー管、フランクフルト歌劇場管、ウィーン・トーンキュンストラー管、シンシナティ響、クラングフォルム・ウィーン、シアトル響、デトロイト響、バンクーバー響、ダルムシュタット州立劇場管などを指揮し、好評を博した。今夏は、シュレスヴィヒ＝ホルシュタイン音楽祭でアンサンブル・レフレクトールを指揮する。ウィーンのアルノルト・シェーンベルク合唱団の歌手およびアシスタントを経験したことから、歌手との共演も多い。オペラでは22年にシンシナティ響とバーンスタイン〈キャンディード〉（演奏会形式）を振ったほか、ザルツブルク音楽祭で子供のためのオペラを指揮した。読響初登場。

7/9
定期

7/13
土曜マチネー

7/14
日曜マチネー

Maestro

7/19
名曲

7/21
横浜マチネー

Maestro

指揮

エリ阿斯・グランディ

ELIAS GRANDY, Conductor

俊英グランディが
時代を超え愛される
珠玉の名曲を披露



©読響

確かな技量と傑出した才能で注目を浴び、オペラとコンサートの双方で活躍の場を広げるドイツの俊英が、ブラームスとショパンの名曲に新たな息吹を吹きこむ。

ドイツ人と日本人の両親のもと、ミュンヘンに生まれる。バーゼル、ミュンヘン、ベルリンの各地で指揮とチェロ、音楽理論を学ぶ。ベルリン・コーミッシェ・オーパー管のチェリストを経て、指揮者としてのキャリアをスタート。2015年、ショルティ国際指揮者コンクールで第2位となり、一躍世界的な注目を集めた。12年から16年までダルムシュタット市立劇場の第1指揮者（カペルマイスター）を務め、15年から23年まではハイデルベルク市立劇場の音楽総監督を務めた。25年4月、札幌響の首席指揮者に就任予定。モンテヴェルディ、モーツァルトなどバロック、古典派の作品から、ヤナーチェク〈カーチャ・カバノヴァー〉、ハース〈朝と夜〉、ルジツカ〈ベンヤミン〉などの近現代作品まで幅広いレパートリーを誇る。

これまでに、フランクフルト放送響、フランクフルト歌劇場管、ザルツブルク・モーツァルテウム管、ブレーメン・フィル、ミュンヘン響、ルクセンブルク・フィルなどに客演。23年5月にはウィーン響にデビューし、成功を収めた。オペラでは、23年1月にフランクフルト歌劇場の〈ウェルテル〉で絶賛されたほか、エッセン歌劇場で〈仮面舞踏会〉、ミネソタ・オペラで〈エレクトラ〉、ハイデルベルク市立劇場で〈ルル〉、〈蝶々夫人〉などを指揮し、成功を収めた。読響とは20年、23年に続き3度目の共演。



©Marco Borggreve

チェロ

ユリアン・シュテッケル

JULIAN STECKEL, Cello

世界から注目を浴びる現代最高峰のフルート奏者。パリ生まれ。リヨン国立音楽院を、満場一致の首席で卒業。ランパル国際コンクール第2位、ブダペスト国際コンクール第3位など受賞多数。トゥールーズ・キャピトル国立管首席奏者、パリ国立オペラ管第1首席奏者、シカゴ響首席奏者を歴任し、2015年から22年までベルリン・フィル首席ソロ奏者を務めた。ソリストとしてバレンボイム、ブーレーズ、エッセンバッハら巨匠と共演。シカゴ響とのニールセンの協奏曲は地元紙で「音色やダイナミクスが超人的とも言えるほど統制されている」と絶賛された。室内楽では内田光子、ロジェら名手と共演を重ね、カーネギーホールやルツェルン音楽祭など世界の檯舞台で活躍している。読響初登場。

温かい音色と豊かな音楽性で魅了するドイツの俊英チェリスト。リヴィニウス、ペルガメンシコフ、シフらに師事。2010年ミュンヘン国際コンクール優勝、聴衆賞などを受賞。ロストロポーヴィチ国際コンクール第2位、カザルス国際コンクール第2位など受賞多数。エッセンバッハ、ノリントン、ヴェンツァーゴ、フルシャら名匠の指揮で、ライブツィヒ・ゲヴァントハウス管、バイエルン放送響、ベルリン放送響、パリ管などと共演。室内楽では、C. テツラフ、R. カブソン、タメスティ、フォークトらと共演し、ルツェルン音楽祭など世界の主要音楽祭に出演している。録音も数多くリリースし、「20世紀チェロ協奏曲集」はドイツの権威あるエコー・クラシック賞を受賞。現在、ミュンヘン音楽大学教授。読響初登場。



©ヤマハ株式会社

フルート

マチュー・デュフォー

MATHIEU DUFOUR, Flute

7/9
定期

Artist

7/13
土曜マチネー

7/14
日曜マチネー

Artist

7/13
土曜マチネー

7/14
日曜マチネー

Artist



©読響

ハープ

景山梨乃 (読響ハープ奏者)

RINO KAGEYAMA, YNSO Harp

豊かな音楽性で若くして圧倒的な実力を誇るハープ奏者。東京芸術大学在学中に渡仏、2011年パリ・エコールノルマル音楽院最高ディプロムを満場一致で取得。ベルリン芸術大学で学び、ベルリン・フィルのカラヤン・アカデミー修了。ベルリン・フィル、ハンブルク歌劇場管などドイツ各地の楽団にも客演した。日本ハープコンクール (アドバンス部門) 第1位に加え、ミュンヘン国際コンクール第3位、リリー・ラスキーヌ国際ハープコンクール第2位など国際コンクールでの受賞多数。14年から23年まで東京響首席ハープ奏者を務めた。パユ、クヴァントらの名手と共演したほか、オペラシティ「B→C (ビートゥーシー)」出演などソロや室内楽でも活躍。23年11月読響入団。趣味は相撲観戦。

7/19
名曲

7/21
横浜マチネー

Artist

早熟の天才として欧州音楽界で話題沸騰中の新星ピアニスト。1997年アルバニア生まれ。パリ国立高等音楽院を最優秀で卒業。同音楽院の博士課程とソルボンヌ大学の修士課程で音楽学と分析の研鑽を積んだ。7か国語を使いこなし、ヴァニティ・フェア誌のフランス版に「世界を変える若者」の一人として紹介された。ルイージ・ウルバンスキ、ドゥナーヴら名匠の指揮で、パリ管、ベルリン・コンツェルトハウス管、BBC響、モントリオール響、デンマーク国立響、シドニー響などと共演し好評を博す。2017年、初のアルバム「鏡」をリリースし、フランス各誌で絶賛された。バロックから古典・ロマン派、エスケシュ、マントヴァーニらの現代作品まで幅広いレパートリーを誇る。読響初登場。



©Caroline Dautre

ピアノ

マリー＝アンジュ・グッチ

MARIE-ANGE NGUCI, Piano

コネソン

〈ラヴクラフトの都市〉から“セレファイス” (日本初演)

フランスのギヨーム・コネソン (1970～) は現在、世界中から引く手数多の作曲家のひとりだ。交響詩〈ラヴクラフトの都市〉もまた、そういった“引く手”のひとつによって生み出された。当時、コネソンがコンポーザー・イン・レジデンス (座付き作曲家) を務めていた二つのオーケストラ、リヨン国立管弦楽団とオランダ・フィルハーモニー管弦楽団が、彼に作品を共同委嘱。2017年に後者が世界初演した。

タイトルの「ラヴクラフト」は、20世紀初頭のアメリカの幻想小説家ハワード・フィリップス・ラヴクラフトを指す。“セレファイス”は全3楽章の交響詩の冒頭楽章で、ラヴクラフトの同名の短編小説に基づく。それは主人公の夢見る幻の街の名前。大理石の城壁、青銅の門、縞瑪瑙の路を持ち、異教の神官たちが暮らす。神官は、ここに時の流れはなく、永遠の若さだけがある、と主人公に伝える。

曲は5つの部分からなる。序奏にあたる「青銅の門」では、金管楽器のファンファーレに、その他のパートが“衝突”を繰り返す。ヴァイオリンが伸びやかな旋律 (第1主題) を弾き始めると、場面は「縞瑪瑙の街への入城」へ。打楽器などを駆使して街路の喧騒をさまざまに描く。

その喧騒を突き抜けてトランペットが鳴り響くところからが「トルコ石の神殿」。付点音符と連符を組み合わせたモチーフ (第2主題) は、異教の祭りの活気を表している。その活気が最高潮に達すると「70の喜びのある薔薇水晶の宮殿」に入り、音楽は落ち着きを取り戻す。木管楽器、ハープ、チェレスタの幻想的な響きに包まれながら、弦楽器が息の長い旋律 (第1主題の変奏) を弾く。

「蘭の冠を戴いた僧侶の7つの行列」では、7拍子のオスティナート (固執音型) 上で、楽想が盛り上がっていく。このオスティナートは「縞瑪瑙……」の第1主題を圧縮したもの。きらびやかさを増していき、その頂点で曲を終える。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：2017年／初演：2017年10月13日、オランダ・ユトレヒト／演奏時間：約9分

楽器編成／フルート3 (ピッコロ持替)、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット3、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器 (小太鼓、ミリタリー・ドラム、サスペンデッド・シンバル、シズル・シンバル、トライアングル、タンブリン、グロッケンシュピール、シロフォン、ヴィブラフォン、シェイカー、鞭、クラベス、テンブル・ブロック、マーク・ツリー)、ハープ、ピアノ、チェレスタ、弦五部

7/9
定期

Program Notes

矢代秋雄
チェロ協奏曲

矢代秋雄（1929～76）の音楽歴は、5歳のときに始まる。まずはピアノを習い始めた。10歳で諸井三郎に師事したのち、橋本國彦^{いけのくにとも じろう い ふく べ あきら}、池内友次郎、伊福部昭について作曲の勉強を続ける。諸井からはドイツ式、橋本からは近代フランス風、池内からはバリ音楽院流、伊福部からは管弦楽を十全に生かす作曲法を学び、全方位に対応できる力をつけた。

その基礎力を武器に1951年、東京音楽学校の同学年だった 黛 敏郎^{まゆずみとしろう}とともに、第2回フランス政府給費留学生としてパリ国立高等音楽院に入学。シャラン、ブーランジェ、メシアンといったフランスの誇る教師陣の下で研鑽を積む。留学から帰ったあと、弦楽四重奏曲と交響曲で高く評価される。NHK交響楽団の委嘱で書いたチェロ協奏曲（1959～60年）では尾高賞^{お た か}を受賞した。

矢代自身はチェロ協奏曲に関して「きれ目なく演奏される四つの部分からなるが、あくまで全一楽章として聴かれることを作曲者は望んでいる」とした。ここでは矢代の要望にしたがい、協奏的ソナタ形式をとる単一楽章の作品（ただし独奏と総奏の登場順は従来の協奏曲と逆）として、その内容を吟味する。

提示部は独奏チェロのカデンツァから始まる。ここで主要なテーマをすべて^{じょう}上に載せる。音程関係に即して言えば、①跳躍・順次・跳躍、②順次・跳躍・順次、③同音・順次と進行する3つの主題だ。続いてティンパニ、ホルン、フルートとチェロとで3つの主題を改めて示す。

展開部では独奏チェロが②、そして③を、続いてアルトフルートが①を、独奏チェロが②を、改めてアルトフルートが①を進展させる。ティンパニの連打からテンポを速め、独奏と総奏とで①を大々的に変形させていき、クライマックスを迎える。

その直後、独奏チェロのカデンツァで再現部が始まる。ここでチェロが主要なテーマを回想し、管弦楽の一部と呼び合いながら、③を静かにささやいて曲を終える。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：1959～60年／初演：1960年6月24日、東京（公開収録）／同年9月19日、ワルシャワ（舞台初演）／演奏時間：約22分

楽器編成／フルート2（アルトフルート持替）、オーボエ、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シンバル、ヴィブラフォン、銅鑼）、ハープ、チェレスタ、弦五部、独奏チェロ

ブラームス
交響曲 第2番 二長調 作品73

1877年夏、ヨハネス・ブラームス（1833～97）はペルチャハにいた。オーストリア南部ケルンテン州にあるこの保養地は、著名人の集まるところとして有名だった。ここで山を見渡し、谷を散策する日々を過ごした作曲家は、友人に「（ペルチャハには）たくさんの旋律が飛び交っている。それらを踏みつけないようにしなければならない」と書いて送った。

このようにして感じ取った“旋律”の集成が、交響曲第2番なのかもしれない。この地にやってきた6月に着手し、9月までに大部分を書き上げ、次の滞在先であるドイツ南西部バーデン＝バーデン近郊のリヒテンタールで仕上げに励んだ。

初演は同年12月30日、ウィーンにて。この日の演奏会には次のような批評が残る。「第2交響曲は玄人素人の区別なく、聴く人の心に暖かい陽の光をあてる。（中略）この曲は、よい音楽を聴きたいと願うすべての人のために書かれたと言ってよい」。

第1楽章 低弦楽器の奏する「ニ・嬰ハ・ニ・イ」はいささかぶっきらぼうな冒頭だが、続いてホルンが第1主題を吹き出すと、木管群がそれに呼応して田園風の楽想を明らかにする。チェロによる第2主題は〈ブラームスの子守唄〉によく似た旋律。3拍子の基本リズムを利用して、ときおり変拍子（ヘミオラ）風の運びを見せる。

第2楽章 上拍で始まる主題が、以後のシンコペーション気味の旋律を引き出すことで、緩徐楽章にもかかわらず、前進する力の強い音楽を実現する。

第3楽章 田園風の楽想を受け継ぐ3拍子の部分（A）と、活発に動き回る2または3拍子の部分（B）が交互に登場する（A－B〔2拍子〕－A－B〔3拍子〕－A）。

第4楽章 第1楽章同様、ぶっきらぼうな開始が耳をひく。穏やかな第2主題が続く。無窮動の中に小節線をずらしたような肩透かしがたびたび現れる。この交響曲では一貫して「リズム遊び」に意識が向けられている。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：1877年／初演：1877年12月30日、ウィーン／演奏時間：約43分

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、弦五部

ドヴォルザーク

序曲〈謝肉祭〉 作品92

7/13
土曜マチネー

7/14
日曜マチネー

Program Notes

1891年、チェコの国民的な作曲家となったアントニン・ドヴォルザーク（1841～1904）は50歳になり、人生の節目を迎えていた。この年にプラハ音楽院の教授に就任し、さらにプラハ大学からは名誉博士号を、ケンブリッジ大学からは名誉音楽博士号を授与され、名声を確固たるものにする。前年に交響曲第8番を書きあげたドヴォルザークは、演奏会用序曲の3部作という新しいアイディアに取り組む。作品のテーマは「自然、人生、愛」。人間にとってもっとも根源的なテーマを序曲3部作で表現しようというのだから、これは野心作といってもよいだろう。第1曲〈自然のなかで〉が3月末から7月にかけて、第2曲〈謝肉祭〉が7月から9月にかけて、第3曲〈オセロ〉が11月から翌年の1月にかけて作曲された。〈自然のなかで〉と〈謝肉祭〉は、それぞれケンブリッジ大学とプラハ大学の名誉博士号授与の返礼として献呈された。

序曲3部作〈自然、人生、愛〉は翌年に初演されたものの、出版時には3曲がそれぞれ独立した作品として扱われることになった。現在でも3曲がまとめて演奏される機会は少なく、第2曲の〈謝肉祭〉が群を抜いて高い人気を誇る。謝肉祭（カーニバル）とはキリスト教の四旬節の断食の前に、ごちそうを食べたり仮装をしたりする祝祭のこと。曲の冒頭は、まさしくお祭り騒ぎだ。シンバル、タンブリン、トライアングルといった打楽器群がにぎやかに打ち鳴らされ、活気にあふれた主題が奏でられる。これに愁いを帯びた弦楽器の主題が続く。祭りの喧騒が落ち着くと、幻想的な中間部に入る。イングリッシュ・ホルン、フルートが安らいだ雰囲気を出す。クラリネットの語りかけるような主題は、3部作で共通して用いられる「自然の主題」。やがて緊迫感を高めながら、ふたたび祭りの喧騒が戻り、熱狂のなかで曲を閉じる。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1891年／初演：1892年4月28日、プラハ／演奏時間：約10分

楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（シンバル、トライアングル、タンブリン）、ハープ、弦五部

7/13

土曜マチネー

7/14

日曜マチネー

Program Notes

モーツァルト

フルートとハーブのための協奏曲 八長調 K.299 (297c)

1778年、ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト (1756～1791) はパリを訪れた。目的は就職活動である。故郷ザルツブルクの宮廷楽団を辞職したモーツァルトは、自らの才能にふさわしい活躍の場を求めて、まずはマンハイムへ、続いてパリへと向かった。しかし、フランス人たちの音楽の趣味は、モーツァルトにとって好ましいものではなかったようである。故郷の父親に宛てた手紙で「彼らは粗野で、いやらしいほど思いあがっています。音楽に関しては、けだもの同然の連中です」と痛烈に非難している。

およそ半年にわたるパリ滞在は、就職活動という点では失敗に終わったが、作曲活動においては豊かな実りをもたらした。この間にパリの有力者や音楽家たちとの交流から、いくつもの名曲が誕生している。そのひとつがフルートとハーブのための協奏曲。パリ滞在中のモーツァルトは音楽愛好家のド・ギーヌ公爵の娘に作曲を教えていた。公爵は自らが演奏するフルートと娘が^{たしな}嗜むハーブをソリストにした協奏曲を依頼する。モーツァルトは優雅で気品にあふれた作品で依頼にこたえたが、公爵は作曲の報酬を支払わないばかりか、娘のレッスン料も半額しか払おうとしなかったという。パリはモーツァルトに優しい街ではなかった。

第1楽章 アレグロ 平明で悠然とした主題で開始され、フルートとハーブの澄んだ音色を生かした爽快な楽想がくりひろげられる。終結部の前にカデンツァの挿入が想定される (以降の楽章も同様)。

第2楽章 アンダンティーノ 冒頭の憧憬に満ちた主題はこの曲の白眉か。オーケストラから管楽器が省かれ、ふたりのソリストを引き立てる。

第3楽章 ロンド、アレグロ ガヴォット風の主題で開始される雅やかなロンド。さわやかな涼風のように颯爽と曲を閉じる。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1778年／初演：不明／演奏時間：約30分

楽器編成／オーボエ2、ホルン2、弦五部、独奏フルート、独奏ハーブ

ドヴォルザーク

交響曲 第8番 ト長調 作品88

「あいつがゴミ箱に捨てたスケッチだけでも一曲書けそうだ」とは、ドヴォルザークの卓越したメロディメーカーぶりを称えたブラームスの言葉。ブラームスはいち早くドヴォルザークの才能を認め、ベルリンの出版業者ジムロックに対して彼を推薦した。おかげでドヴォルザークは〈スラヴ舞曲集〉で大きな成功を収め、名声をヨーロッパに広めることになる。以来、ジムロックはドヴォルザークと協力関係を続け、作品の出版に尽力した。

ところが、次第に両者の関係に溝が生まれてしまう。売れ行きのよい小品や歌曲を求めるジムロックと、交響曲のような大作に創作のエネルギーを注ぎ込みたいドヴォルザーク。交響曲第7番は〈スラヴ舞曲集〉の続編を書くことを条件にしようじて出版できたが、いよいよ交響曲第8番で両者の思惑は平行線をたどる。「大規模な作品は売れない」と不十分な報酬しか提示できなかったジムロックに対して、すでに作曲家として自信を深めていたドヴォルザークはついに首を縦に振らなかった。売れ筋商品を求める出版社と芸術的な高みを目指す創作者という両者の立場の違いは、なんら現代の事情と変わるものではない。結局、交響曲第8番はイギリスのノヴェロ社から出版されることとなった。かつてこの曲が「イギリス」の愛称と呼ばれていたのは、このような出版事情を反映している。

第1楽章 アレグロ・コン・ブリオ 哀愁を帯びたチェロの主題で開始される。フルートが楽しげな主題を奏で、熱気に満ちた楽想が展開される。

第2楽章 アダージョ 柔和でひなびた^{かんじょ}緩徐楽章。木管楽器の小鳥がさえずる。

第3楽章 アレグレット・グラツィオーソ メランコリックなワルツ。

第4楽章 アレグロ・マ・ノン・トロポ 楽天的なファンファーレで開始され、主題と変奏が続く。次々と表情を変えながら、力強いクライマックスを築く。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1889年／初演：1890年2月2日、ブラハ／演奏時間：約34分

楽器編成／フルート2 (ピッコロ持替)、オーボエ2 (イングリッシュ・ホルン持替)、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、弦五部

7/13

土曜マチネー

7/14

日曜マチネー

Program Notes

7/19
名曲

7/21
横浜マチネー

Program Notes

ウェーバー

歌劇〈魔弾の射手〉序曲

カール・マリア・フォン・ウェーバー（1786～1826）の〈魔弾の射手〉は、ドイツの宮廷劇場においてもイタリア・オペラの上演が一般的だった時代に書かれた。ボヘミアの森を舞台とした民俗的なテーマを、民衆の歌や舞踊、ジングシュピール（台詞劇と歌を融合させた歌芝居）という形式などをとりこみつつ総合芸術にまとめ上げた点で、ロマン派オペラ、そしてドイツ・オペラの始まりを画する作品で、ワーグナーをはじめとする後の創作の範となった。

物語の主人公、猟師のマックスは射撃大会に優勝すれば恋仲にある護林官の娘アガーテと結婚できるのだが、どうしたわけか最近調子がすこぶる悪い。悪魔ザミエルは猟師仲間のカスパールをそそのかして、焦るマックスに百発百中の魔弾を渡す。マックスは射撃大会で腕の冴えを示すが、最後の1発はアガーテに当たる呪いがかかっていた。しかし隠者の授けた花冠がアガーテを救い、逸れた魔弾はカスパールに命中する。マックスはすべてを告白し、領主から許しを得て歓びのうちに幕を閉じる。

さて、本作は序曲も名作の誉れが高いが、それは劇の要所の旋律を用い、本編のドラマを凝縮し、要約しているからだ。オペラの序曲をこうして劇本体と結びつけた点でも、ウェーバーは後世に大きな影響を与えたのである。

曲はまず弦がユニゾンで荘厳なテーマを出した後に、4本のホルンによる有名な旋律が歌われる。モルト・ヴィヴァーチェにテンポを速めると、悪魔ザミエルとマックスらが出会う不気味な おおかみだに 狼谷のテーマによる第1主題が現れる。続く第2主題はヴァイオリンとクラリネットが歌う温かく柔和なもので、これはオペラの中ではアガーテの愛と歓喜を表している。邪悪な心とそれを打ち砕く善なるものの勝利というドラマは、この序曲にも組み込まれているのである。

〈江藤光紀 音楽評論家〉

作曲：1817～20年／初演：1821年6月18日、ベルリン（歌劇全曲）／演奏時間：約10分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部

ショパン

ピアノ協奏曲 第1番 ホ短調 作品11

フレデリック・ショパン（1810～1849）の残した2曲のピアノ協奏曲は、出版順が前後したために番号が逆転しているが、青年期に立て続けに作曲されている。第1番は第2番を書いた翌1830年の20歳の手による作である。前年にウィーンで開いた演奏会の大成功の評判は、故郷のワルシャワにも伝わった。30年3月には第2番の協奏曲などを弾きワルシャワで公開デビューを果たす。ショパンはこの年のうちに再びウィーンへ出るが、第1番はワルシャワでのデビューの後に着手され、同地を離れるにあたって開かれたお別れ演奏会で初演された。この演奏会には、ワルシャワ音楽院の同窓で若きショパンが恋心を寄せていたとされるソプラノ歌手、コンスタンツヤ・グワトコフスカも出演し、ロッシーニのアリアを歌っている。オーケストラを美しく着飾るかのように華麗に舞い、あるいはロマンティックな夢想に耽る本作の若い情熱の発露には、恋愛感情も混じっているのかもしれない。

ショパンがワルシャワを離れた直後に同地で起こった独立運動はロシアに鎮圧され、ショパンは生涯祖国の地を踏むことはなかった。

第1楽章 アレグロ・マエストーソ ヴァイオリンが荘厳に第1主題を歌い出し、カンタービレで歌われる明るい第2主題が続く。たっぷりとした序奏の後に、ピアノが満を持して登場、主題を技巧的に彩っていく。

第2楽章 ロマンツェ、ラルゲット 弱音器付きの弦の柔らかな序奏に導かれ、ピアノが耽美的な世界を紡ぎ出す。中間部では憂いを帯びたメロディーが激情の吐露のように歌われる。結尾部はピアノが冒頭主題を装飾して深々とした余韻を残す。

第3楽章 ロンド、ヴィヴァーチェ 快活で歯切れのよいロンド主題を中心に、ピアノが鍵盤上を自在に駆け回る。副主題には弦のリズムに乗って典雅な旋律が現れる。曲が進むにつれピアノは華やぎを増していく。

〈江藤光紀 音楽評論家〉

作曲：1830年／初演：1830年10月11日、ワルシャワ／演奏時間：約43分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン、ティンパニ、弦五部、独奏ピアノ

7/19
名曲

7/21
横浜マチネー

Program Notes

7/19
名曲

7/21
横浜マチナー

Program Notes

ブラームス

交響曲 第4番 木短調 作品98

ヨハネス・ブラームス(1833~1897)の最後の交響曲となる本作は1884年に着手された。この年の前半、ブラームスは前年に完成したばかりの第3番をプログラムに寄せ各地へ演奏旅行を行ったが、夏になると拠点としていたウィーンから南西にある山間部の保養地ミュルツツーシュラクに移り、そこで本作に専念する。その年のうちに前半の二つ、翌年後半の二つの楽章が完成された。

本作においては古典的な手法への回帰が顕著で、旋法やバロックの変奏手法(終楽章はバッハのカンタータ〈主よ、我は汝を求む〉BWV150を範にしたパッサカリア)を大胆に取り込み、対位法的な扱いも入念になっている。ブラームスの音楽には独特の哀愁を漂わせたものが多いが、この作品ではそうしたメランコリーは諦観ともいうべき深みに達している。全曲を書き上げた時、作曲家は52歳になっていたが、この作品にみられる諦観はこれ以降の創作にも独特の味わいをもたらし、後期の創作を特徴づけるものとなっていく。

第1楽章 アレグロ・ノン・トロppo 冒頭の主題はため息のように切れ切れの旋律からなり、何とも言えない寂寥感^{せきりょう}を帯びている。木管楽器が3連音符に特徴のある第2主題を決然と出すと、チェロとホルンが悲愴な旋律でこれに応える。

第2楽章 アンダンテ・モデラート 最初の主題は古風で鄙びた^{ひな}味わいを持っている。ややあってチェロに温かみを帯びた美しい第2主題が現れる。

第3楽章 アレグロ・ジョコーソ スケルツォ風の楽章で、リズムに特徴のある動機が組み合わさり、力強く盛り上がる。本作では唯一明るく快活な楽章。

第4楽章 アレグロ・エネルジコ・エ・パッショナート 冒頭に示されたパッサカリア主題が計30回変奏されるが、趣向を凝らした各変奏が全体として大きなドラマを組み上げているところにブラームスの熟達した手腕が感じられる。

〈江藤光紀 音楽評論家〉

作曲：1884~85年／初演：1885年10月25日、マイニンゲン／演奏時間：約39分
楽器編成／フルート2(ピッコロ持替)、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、打楽器(トライアングル)、弦五部